

アトリエ 琉游舎 だより 85号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2020年8月12日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



キョロンキョロンチー キャランキャランツリー

- 最近、早朝「キョロンキョロンチー」あるいは「キャランキャランツリー」という澄んだ大きな声の鳥の鳴き声に目を覚まされることはありませんか？去年までは「ホーホケキョ」「テッペンカケタカ」と鳴く声で起こされていたのですが、今年はこの声が優勢です。
- カラス以外は、ほとんど空を飛んでいる動物を「鳥」と総称してしまうくらい鳥音痴の私ですが、鳴き声を頼りに教えて貰い調べてみるとアカハラという鳥が該当しそうな気がします。
- 冬は暖かい平地に移動しますが5月から8月にかけては本州中部の林間別荘地などに棲む胸から腹への赤味があった色が特徴の鳥です。今年になって急にコリーナで聞くようになった訳は分かりませんが、気候や人がもたらす環境変化で生態系が変化してきているのでしょう。
- 私は少年時代をこの栃木北部で過ごしました。四年前にまたこの地に舞い戻り、以来日々の自然の移ろいとともにお過ごししています。その中で40年間の自然の変化を感じずにはいられません。雲雀や雀、燕のような小型の鳥をあまり見かけなくなった代わりに、カラスが大型化し、かつて見たことがなかった鷺や鶉の姿を頻繁に見るようになりました。甲虫が少なくなり、オタマジャクシは消え、蛍はどこにいったのでしょうか。その代わりにカメムシの大量発生や大型カマキリ、凶暴な蜂たち。かつていたものが消えて行くのは自然の摂理・淘汰の原則ですからそれは自然に任せるべきです。そして私たちもその自然の一員です。その摂理に従うべき人間が、その原則に激しく抵抗し戦うのもまた人間である所以であり性なのでしょう。
- 私の知らないところで今も鳥たちの暗闘が繰り広げられているかも知れません。来年、今より「キョロンキョロンチー」という声を多く聞くようならば、淘汰の原則が粛々と執行されていることになるでしょう。その頃人間とcovid-19との暗闘の結末は？自然の摂理は人にばかり身方するとは限らないと、私たちはそろそろ謙虚に考えるときなのかもしれません。

木 金 土 日

8・9月スケジュール

月	火	水	13	14	15	16
20	21	22	映画会 お休み	21	22	お盆施餓鬼法要 10時半
24	25 読書会 13時半 居酒屋の会16時半	26	27 休舎 映画会お休み	28 休舎	29 休舎	30
31	9月1日	2	3 映画会 13:30	4	5	6 写経会 13:30
7	8 読書会 13時半	9	10 映画会 13:30	11	12 詩話会 13:30	13
14	15	16	17 映画会 13:30	18	19	20

お盆施餓鬼法要

8月16日(日)10時半

8月27(木)28(金)29(土)

休舎します

読書会

8月25日(火)
9月8日(火)
13時半から

映画会

8月13日(木)
8月27日(木)
はお休みで

詩話会

9月12日(土)
13時半から

写経会

9月6日(日)
13時半から

ご先祖様が生まれ育った家にもどられる日は盆だけでなく正月もその日にあたります。しかし今や盆も正月もご先祖様が家に戻ってくる日と考える人はいかばかりでしょうか。かく言う私もかつては、年2回実家に帰省する日という認識しかありませんでした。母の手料理を味わい、孫の成長を喜び、家族の無事と明日の安寧を願う機会。これも親子三代の血脈を確認する核家族時代のご先祖様を祀る一形態かも知れません。しかし「Go to Travel」は推奨されてもお盆の「帰省」は自粛要請されている今年は、これを境にご先祖様を祀る意識はさらに希薄化し雲散霧消する恐れがあります。実はこの希薄化は今に始まったことではありません。

75年前柳田国男は戦後すぐに「先祖の話」を出版し、明治以降天照大神を頂点とする国家神道に強制的に序列付けられた日本の神さま（祖霊）たちの復権を試みました。日本人が古来祀っていた神さまは、家制度の存続を守護する「ご先祖様」と地域の共同体・土地を守護する「氏神様」の二つでした。日本人にとってこの「祖霊」を祀ることが神さまを祀ることです。天照大神は天皇家の氏神であり、戸井家の祖霊でも氏神でもないのです。明治以降天照大神を頂点とする国家神道体系に編集された日本の八百万の神さまたちは、不本意ながらも天照大神の臣下としてその命令に従うことを強制されてきました。巨大な国家権力の下では愛媛の小さな村の戸井家を守護する氏神様もご先祖様も、その神棚の首座を天皇家の氏神に明け渡さざるを得なかったのです。それ以来戸井家も数多の家もその家、一族、村を守護する祖霊の上に天照大神が鎮座し、その神は守護する代わりに自分の命令に絶対服従することを命じてきました。これが明治政府が行い今に続く国家神道の本質です。そうなれば必然的に家を守護する祖霊の地位の低下が起ります。柳田は次第に消えゆく祖霊信仰を憂い「先祖の話」を上梓しました。この著作は天照大神を頂点とする創作された神の序列（それは権力の序列でもあります）を解体し、古来の日本人の祖霊信仰の姿に戻すことが目的だったわけですから、戦争が終るまでは発表できませんでした。国家神道の立場からは大変危険な著作だったのです。

祖霊を祀ることが、それを祀る家や集団の守護と繁栄を祖霊に委託することであり、その集団の祀りをより大きな集団の祀りが統制していくことが政（まつりごと）と考えるならば、政を治める政治というものは必然的に個人の信仰のある秩序の下に統制していくものとなるはずです。戦後75年、国家神道の秩序が解体されて、今や彷徨える神さまの時代なのか、それとも日本人の潜在意識の中にはまだその秩序が残っているのか、神も仏もない不信の時代なのか、少なくとも柳田が望んだような家制度の存続と一体化した祖霊信仰は今やほとんど解体されているでしょう。私は今を混沌や無秩序の時代とレッテルを貼って論評するほど博学でも厚顔でもありませんが、この様な一見何が何だか分からない状況にこそ、人々の持つ本質的な共通相が見えてくる気がしてなりません。例えば先号に書いた「地獄の釜の蓋が開いて、ご先祖様が一齐に自分の家を目指して歩いている盆の光景」に見られる盆の風習です。それは死んだ人も今を生きている人も一所に集まり過去の御守護を感謝し未来の安寧を願う場です。死者と生者が一堂に会する生死不二が顕現する場です。そして日本人は仏教の教義がそれと矛盾していようが、国家神道が祖霊をないがしろにしようがそんなことはお構いなしに、ただひたすら祖霊に感謝し守護を願って今に到ったのです。それは日本人の根本的な死生観に違いありません。仏教や儒教やらの教えや政の要請によって何重にも化粧を施された日本人の死生観から素顔を取り戻すチャンスが今あると私は考えます。その素顔こそがありのままの私であり日本人なのです。

私は自分に子供ができるまで、必ずしも盆と正月に帰省をしていたわけではありません。仕事が片づかなかったのか、東京にいた方が楽しかったのか記憶が定かではありませんが、お参りする墓があるわけでもなく、先祖を意識する場は皆無でしたから、盆や正月がご先祖様と相見える機会という考えは全くありませんでした。互いの無事を確認し母の手料理を味わうだけであればいつでも帰省できます。ところが子供が出来ると状況は一変し定期的に帰省するようになったのです。これを少し理屈っぽく分析するとこういうことです。親にとって子供は未来ですが、子供にとって親は過去です。親子は同じ現在を生きていても子は親の過去と一緒に生きることはできません。しかし親は子の未来と一緒に生きていくことはできるのです。自分は子として親の過去を頂き今ここにあること、同時に自分は親として子の未来をこれから生きていかなければいけないことに気づいたのです。ここに親・子・孫の三つのいのちが繋がりました。過去現在未来の三世を同時に生きる形がここにあります。さらに日本人は生者にとどまらず、死者であるご先祖様も祖霊として三世を当時に生きていると考えました。死者たちは今を生きる私たちを守護し生者はその守護に感謝するという祖霊信仰です。私はこれがありのままの日本人の死生観ではないかと考えます。これはまた永遠のいのちに感謝しそのいのちを繋いでいくために、仏教者として日々を行い続けることと全く同じことだと考えています。

8月は広島と長崎に原爆が投下された月。8月は戦争をやっとやめてもらえた月。8月は戦死病没公私殉難の霊や有縁無縁のすべての祖霊をお迎えし、お見送りする月。8月はこの日本中に祖霊が満ちあふれ、死者と生者が一同に会する月。8月は誰もが手を合わせ、自分だけでなく他者にも思いを馳せる月。8月は私たちが永遠のいのちに生かされていることを自覚する月。もし日本人の誰もが8月をその様な月と考え、永遠のいのちに自然と手を合わせ感謝し未来の安寧を願う光景があたり前となれば、8月は熱中症と新型コロナの脅威に怯えるだけの月ではなく、鎮魂と生きる喜びと希望に満たされる月であるはず。これが暑さ 琉游舎：戸井 出琉・恭子
お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152
矢板市大橋2319-17コリーナ矢板C-850